

第 1 部 投稿編

平成 24 年度に『広報おおむた』などで募集した「炭鉱のエピソード」を活字にして掲載したものです。

三池炭鉱と私

本 多 千佳子

昨年の秋に世界記憶遺産である、山本作兵衛の絵を見に、田川の記念館に、夫婦で、出かけました。どの絵も当時の炭鉱の事を1つ1つ丁寧に書いてあり、人々の表情も着物の柄も一人、一人違った色、形、それは繊細に書き込んでありました。どこからか、炭坑節が流れてきました。記念館の方に「この炭坑節は大牟田の炭坑節ですよ。」と言ったら「いいえ田川が発祥の歌です。」と言われて「え一大牟田じゃないのかな。」と、ちょっとがっかりしました。

私たちは「月が出た出た月が出たヨイヨイ三池炭鉱の上に出た」と思い込んでいましたが、田川の方は「三井炭鉱の上に出た」と歌うようです。

大牟田と荒尾の県境に生まれた時から、住んで暮らしてきた私にとって、炭鉱は切り離すことのできないものです。ですが私の家族が炭鉱に勤めていたわけではありません。

昔の、炭鉱の方たちから言わせれば、私たちは外(ガイ)の者です。私が小学校の頃から、炭鉱の景気が一番いい時期でした。私の家は今で言う母子家庭でした。

父は戦死でした。私が2歳の時に亡くなり、とても貧乏でした。

母は心臓の病で、身体は丈夫ではありませんでした。その母も、今なら治る病気で昭和28年の10月に亡くなりました。

今でも、はっきり覚えています。1年生の時、その頃は1月1日は登校日になっていたようで、学校に行っていました。学校はもう無くなってしまった三里小学校でした。

学校に行くと、私みたいなガイの者はそれなりの格好ですが、炭鉱に勤めておられる家庭の子供さんたちはすごくおしゃれで、とても綺麗な着物で襟元には毛皮の襟巻でした。

本当にうらやましく思ったものです。炭鉱の仕事がどんなに大変なものか知らず、「私の父がいて、炭鉱に勤めていたら良かったのに」と思いました。

小学校2年の時、学校の校舎が足りず、2年生だけが、四ッ山社宅の1番奥の海辺の社宅を改造した校舎に通うことになりました。まだ2年生の子供には遠い遠い所がありました。改造したといってもただ1階部分の中の間取りを壊しただけで2階はそのままでした。今考えてみると、子供の足で1時間以上かかっていたと思います。三里町から早米来町を通り、ガードの下を抜け、二頭山の下を通り、社宅の中を海の方へ歩いて、やっと着きます。

本当に遠い道のりでした。三里小学校までは家から5分で行けるのですから。

それでも、天気の良い時は良いのですが、雨の時は大変でした。二頭山の所を通る時は、山からの風と雨で傘も差せませんでした。でも子供は遠い道のりも道を覚えて、炭鉱病院の方を通り、二頭山の山を越えて帰ったりしていました。それはそれなりに楽しんでいたのかもしれない。

運動会なども四ッ山も広くて、1区、2区、3区、どれぐらいあったか忘れましたが、子供より大人の方が、一生懸命でした。それはそれは応援は凄いものでした。ガイのもんにも負けるなよとか。運動会は今は校庭に子供たちは200名ぐらいですが、私たちの頃は1,500名ぐらいおりました。

校庭に子供と親、合わせれば何人ぐらいだったのでしょうか？もう校庭はあふれていました。

それは賑やかな運動会でした。

私の人生も先の方が短くなってきました。でも今までいろんな事で炭鉱と関わってきたように思います。昭和38年三川鉱の事故があり、たくさんの方が亡くなられたり、けがをされたり、大変なことでした。

何十年たった今でも、病気で苦しんでおられるとか、家族の方も大変な思いをしておられるようで、何度かテレビを通して知りました。

だんだんと世の中も変わって石炭に変わって、石油、ガスを使うような時代になりました。

私がまだ幼い頃、どこだったか場所は覚えていませんが、石炭の燃えカスを拾いに行っていました。それで、食事の支度をしていたように思います。

寒い時は家の中でコークスをたいて、暖をとっていました。火力が強く、とても温かでしたけど、今考えるとガスが出て、身体に悪かったのではないかと思います。

私も22歳の時結婚しました。ちょうど三川坑事故の1年後、東京オリンピックの年で、天皇家の義宮様の御成婚の年でもありました。主人の里が島原半島でしたので、四ツ山の船着き場から、渡海船に乗って里帰りしていました。そのうち、炭鉱は皆、閉山になってしまいました。

炭鉱が閉山になると、大牟田も荒尾もだんだんと寂しい街になっていきました。

炭鉱の社宅もだんだんと壊されていきました。私たちも人並みに車を持つようになり、主人の里にもフェリーで行くようになりました。渡海船乗り場も三池港に変わりました。

ずいぶん月日がたち、主人と港に行ってみました。渡海船の乗り場は人影もなく荒れ果てていました。社宅は跡形もなく、ずっと奥まで見渡せました、もう何も無くなったと寂しくなりました。昔小学校の頃社宅の中を歩いて行く時、帰る時、とても賑やかでした。子供の声が出て、売店にはたくさんのお客さんがいて、炭鉱の金受け^{*}(給料日)の15日は私の家の近くの県境に市場があり、お客さんがいっぱい。「今日はお客さんが多いね。」というとお店の人が、「今日は炭鉱の金受けやけん多か」と言われました。

車で二頭山にも行ってみました。人影はなく、あるのは草が茂り、たくさんのごみでした。

今、7月の大蛇山祭りで賑っています。大蛇山が幾つも出て、もちろん炭坑節が大きく(月が出た出た月が出たヨイヨイ三池炭鉱の上に出た～)皆浴衣や法被で踊り、大蛇山は首を大きく左右に振りながら大きな口から火を噴きます。大蛇山ばやしも「ジャジャンコジャンコジャンコジャン」と、とても楽しいお祭りです。

今、宮原坑を世界遺産にと大牟田市も荒尾市も登録してもらうよう、力を入れています。

世界遺産に登録され、賑やかな大牟田が戻ってくることを願っています。

炭住と四山鉱

古賀敏雄

私は昭和12年生まれ、74才で現住所に新築するまで、四山社宅に約50年間住みました。父は四山鉱内運工として勤め、昭和39年1月に定年退職し、6月に私が四山鉱に採用され、閉鉱まで勤めました。



四山坑正門

当時、私は内電工として三交替勤務になりました。坑内600m坑道を毎日巡回し、父が働いた個所を通る度に、いつも父のことを思い出し、感無量でした。父も平成4年に他界し、母も現在市内の養護老人ホームにお世話になっています。現在97才です。私が行く度に社宅の話をするると昔の事をよく覚えて話します。



四山坑港沖立坑

炭住生活をして良かったこと。

- 一．会社の通勤に一番近いこと。
- 一．海が近い。よく潮干狩りに行ったこと。
- 一．どこの家にも子供が多かったこと。
- 一．社宅の中を通勤バスが通っていた。
- 一．月に4回講堂で映画の上映があった。



四山社宅(二頭山より)

昭和50年に常一番^{*}勤務となり電車係として働き、その後保安部安全推進員になり、長崎県の池島炭鉱に入坑したことが勉強になりました。

坑内に長く勤めますといろいろな事もあります。私が保安推進員になる前に珍しい事に出会いました。

当時電車係として、三池島の坑底付近で作業していたとき、作業が終わり昇坑人車の時間まで30分あり、同僚の高橋君が「古賀さん三池島まで遠いとですか」。私は前に何度か来たことがあり、高橋君は初めてでした。私が「昇坑時間まで少しあるので坑底まで行くか」と言い、高橋君を連れて行き、坑底より上をのぞき高橋君が「お月さんのようです」と言い驚いていたようです。三池島の坑口より坑底まで520mもあり坑口が小さく見えます。冬は風が強いです。しばらくすると近くで妙な音が聞こえ、近寄るとトンビがバタバタ羽を広げていました。よく見ると、眉間より出血しており、体調1m以上はありました。高橋君が「古賀さん、トンビ坑外に持って上ってよかろか」。私は「何にする」と聞き、高橋君は「友人の新築祝に贈りたい」と言っており、その時トンビは生きていたのではなく、近くのビニール袋で包み昇坑しました。後日高橋君に「トンビはどうしたのか」と聞いたところ、剥製にして贈ったとのことでした。（トンビは上空で三池島の坑口で吸い込まれたのでしょうか。入気ですから…。参考までに三池島は入気です。炭鉱の中での挨拶は「ご安全に」でした。



四山社宅と三井アルミの煙突



大牟田市立体育館
(昭和30年代)

幼少年時代の記憶

羽 江 邦 之

幼少年時代の思い出の中に、大人たちの言い争いやけんかなど、騒動と地底が大きく動き、建物の一部が空から降ってきた出来事がある。青年へ、大人へと成長するうちに、あれは何だったのか理解ができるようになってきた。

頭の中に、染み付いた歌がある。労働者作曲家荒木栄氏の「がんばろう」である。日常の生活の中で、常に耳にし、頭の中、心に残ったのである。思うに、昭和34年12月「指名退職勧告」に始まる会社のロックアウト、労働者の無限ストライキ、組合員と主婦が一体となった団体集会、久保清氏の死、ホッパー大決戦など、私の日常の中の出来事の中で、歌われていたようで、私自身、父や母などと一緒に歌っていたのであろう。



そして、昭和38年11月9日、午後3時15分、遊んでいる（どこで遊んでいたか記憶がはっきりしない）諏訪川の向こうに地響きとともに黒煙が見えた。三川坑炭塵爆発である。幼少年時代、子供心にも、目や耳、身体で感じたことが心に残っている。

大人たちの争いが、何だったのか。そして、「がんばろう」の歌を歌う大人たちの熱気は何だったのか。今は何と無く分かるような気がする。

「がんばろう つきあげるそらに……」今日の大牟田の礎を築いた人たち。そういう大人たちの中で過ごした過去の出来事が、今も心に残る、そういう人たちの一つひとつの思い出を私は大切にしたい。今も、ふるさと大牟田に「がんばろう」の歌は響いている。



母によると、団体集会等に、よく自分を連れて行ったとのことで、写真の中央に旗を持つ母の姿が確認できる。

三井三池三川鉦の思い出

牛 島 恵美子 (旧姓 仙頭)

昭和 20 年 8 月の大空襲で社宅の周りは火の海でした。子供心に(当時 9 歳) これで終わりかと思いました。すぐに八女市黒木町に疎開しました。十数日で終戦でした。

二ヶ月後、また荒尾に帰りました(西原社宅)。

社宅の皆さんは、家族同様仲良く、互いに助け合い、おじさんおばさんも自身の子と他人の区別なく、しつてもしてくださいました。

戦後の昭和天皇御巡幸の時は、父は採炭で、陛下のすぐ横でニュースに出ていました。我が家の一番の思い出です。天皇切羽[※]です。

子供会

戦後すぐだったと思います。

記憶も定かではないのですが

いかに石炭産業が日本の再建に重要だったかと思われます。

子供会にレコード会社から来られて、子供会の小学生に三井三池のうた、新生三池のうたを教わりました。

前後一、二番バラバラかとも思いますが

三井三池のうた

一. 匂う朝雲 昇る陽に

かざす 自由の旗高く

平和三池の夜が明けりゃ

鐘が鳴る鳴る 鐘が鳴る鳴る

出発だ!!

二. 地下は千尺なんのその

招く 切羽に 血は燃ゆる

うたう 文化 潮風に

今日も 積み出す 今日も積み出す クロダイヤ

三. なびく煙は不知火の (ここから先は忘れました)
建設だ!!

新生三池のうた

炭の三池か 三池の炭か
黒いダイヤの 山なす所
汽車は 行く行く お船は走る
さあさ新生三池から タントタタント
国が建つ 国が建つ

(二、三番はあまり覚えていません。どなたかご存知の方がおられましたら教えていただきたいと願っていますが、なかなか出会いません)

延命球場での少年野球大会、双児の弟二人もそろって出場しました。
(オール三川)

お盆は社宅広場にやぐらを組んで盆踊り大会。大人も子供も楽しみました。

秋の運動会

部落対抗リレーが一番賑わいました。
必死に応援しました。

くろだいや新聞

子供心に一番印象に残っているのが、マンガの「あらま いやよさん」でした。内容も筋も記憶にないのですが、題名だけは今でも忘れません。

プールのような 大浴場

夕方早くから、子供たちは年下の弟や妹を子守がてら連れていって
いました。

浴場が開くのと同時に脱衣場の番号取りです。女の子もそうでした。

16番の川上さんが、一番の人気でした

お年寄りのおばあさんや幼い子等と一緒にワイワイガヤガヤ。それは
楽しいものでした。

入浴の際も、お年寄りの方々から厳しくマナーを教わりました。み
んなきちんと守って違反する子はいませんでした

悲しい思い出は三川鉱の炭塵爆発です。

昭和 38 年、458 名の犠牲者を出し、いまだ療養中の方のおいでに
なる中に

およそ 17 億トン、200 年分を残し閉山。

炭鉱の歴史は閉じられました。

炭鉱のご恩は決して忘れてはならないと思います。

合掌

三池炭鉱の出来事に関する思い出

田 辺 広

1. 三川鉱炭塵爆発について

昭和 38 年 11 月の午後、私が大牟田北高 1 年の時、美術の授業で絵を書いていたら、甘木山から三池港の方向に、“ドーン”という地響きと同時に炭塵爆発の噴煙を見ました。

11 月の秋晴れの空に、黒く長く伸びた雲に何だろうと驚きました。

戦後生まれの私には、広島や長崎の原爆は知りませんが、そのような大きな黒煙でした。

何が起きたのかももちろん分かりませんでしたが、その大きな黒煙の不気味さは、今も覚えています。

後で、それが死者 400 人以上、CO 患者約千の日本史上最悪の炭鉱事故でした。

大牟田の将来を暗示しているようでした。

高校生ながら、大きな不安や恐怖を感じました。

この事故をターニングポイントに、三池炭鉱も衰微が始まり（昭和 35 年の三池争議から既に始まっていたが）大牟田市も寂れていきました。

私としては、残念な思い出です。

2. 有明鉱の火災事故について

確か昭和 59 年 1 月と思いますが、吉野の同僚の新築祝の帰りでした。

その夜は大雪で、救急車が何台もけたたましいサイレンを鳴らして、高田町方面に走っていました。

何も分かりませんでしたが、ただならぬ大事故だと思いました。

それが、死者もたくさん出た有明鉱の火災事故でした。

残念ですが、これを期に三池炭鉱も閉山に向かったと思います。

そして、平成9年3月30日、三池炭鉱は閉山しました。
最後に鉱員たちが、真黒い顔で寂しく笑いながら上がってきたのがこの有明鉱でした。

先日、有明鉱の2つの堅坑を見学しました。

間近に見ると巨大で歴史を感じ感動しました。

しかしこの前、2つの堅坑は解体され残念でなりません。

今後、三池炭鉱が近代化遺産や世界遺産としてよみがえることを期待しています。

大牟田最後の蒸気機関車

今村 洋一

夜更けにめざめると遠い駅の方から小さな短い汽笛の音と連結器の音が聞こえてくることがありました。貨車の入換えは夜中も行われていました。これは仕業中の小休止のひとつです。三池炭鉱から掘られた石炭は、長大な石炭列車に編成され、ここから発進していました。

この写真は私が大牟田駅で撮りました。大高の文化祭で展示したものです。この後、行橋でC1148は廃車となっていました。



梅丸

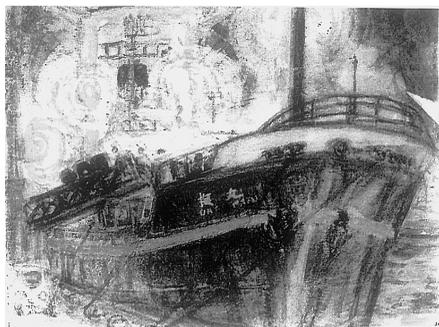
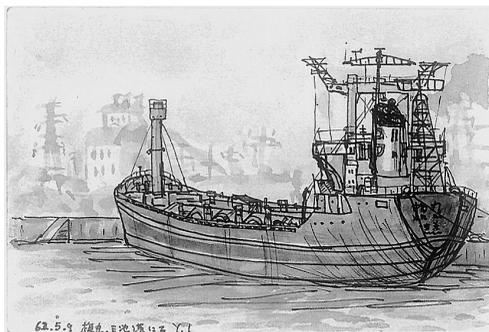
三池港を訪れるとふ頭に停泊する大きな船体の梅丸（5,048 トン 中外商船・神戸）を見ることができました。船腹に描かれた黄色の帯はこの船の特別の仕事を表しています。

炭鉱で産出する石炭に交じるボタを選別して集めこれを運んで遠く四国沖の指定海域に投棄する仕事です。大牟田にボタ山がないのはこの為ではないでしょうか。ボタの積込みは夜までも行われていました。人影もない構内でベルトコンベアの音だけ響いていました。

ボタを満載するといよいよ出港です。内港から出るにはあの有名な閘門（こうもん）を通過しなければなりません。閘門の幅は狭く梅丸のような大きな船はぎりぎり一ぱいの幅しかありません。それも毎回の出船、入船で通り抜けているのですから驚きです。印象に残る出港を記憶しております。それは寒い冬の風の強い日でした。内港の海面も波立っていました。そこに二隻のタグボートが近寄り、いつものように出港準備にとりかかりました。慎重に方向を調整していましたが一気に閘門に突入していきました。見事に通過、圧巻です！感動しました。船体はスピードを上げながら進んで行きました。

最盛期には年間 100 回を超える航海、70 万トンを運んだと報ぜられていました。梅丸は三池炭鉱の仕事をも黙々と支え続けていました。しかし時代の流れが変わり出炭量の減少でボタの量も減り、炭鉱と船会社の契約が打ち切られることになり、ついに最後の航海の日に（平成 5 年 3 月 23 日 7,000 トンを積んで）旅立ちました。廃船となった梅丸は上海でスクラップになったと聞きました。あの姿もう見ることはできません。梅丸として素晴らしい航海を見せていただいた船長さん、さようなら。

（元大牟田高校・三池高校化学教諭、82 歳）



梅丸（今村さん作）

ふるさと、新港町

西 村 恵

大牟田市新港町6番地、三川坑社宅39棟。私が高校1年の夏頃まで住んでいた社宅だ。

諏訪橋から三池海水浴場へ向かう道に入るとしばらくして新港町の入口に辿り着く。

社宅は三川坑と港務所に分かれており共同浴場もそれぞれにあった。

入口右手に自転車屋さん、右手に大久保さん、もう少し入るとバス停、マーケットそして大きな鳥居のある神社があった。私の家は鳥居から左に入り池の横を通って、公園を右手に見ながら三池商事から左に曲がると見えてくる。

5軒長屋の端っこ、馬渡秀雄こと、じいちゃんの家だ。

じいちゃんは昭和38年11月9日炭鉱爆発で亡くなった。ばあちゃんと母、そして私の三人暮らし。父は交通事故死したため、母は私を連れて実家である新港町に戻ってきた。

部屋は6畳、4畳半、3畳と台所でトイレは縁側の端にあった。この時代では当たり前の木造のドッポン便所でギシギシ音が鳴り、よくトイレに落ちる夢をみていたものだった。

部屋は広くて住み良く、広い庭が大好きだった。ばあちゃんの育てた花が、レンガや石で囲まれあちらこちらに咲いており、かわいい小道ができていた。そしてその真ん中には物干し竿に干された洗濯物が風に揺らぎ、縁側から見るその風景が心地よかった。

ばあちゃんは三池縫製で働いていたが、定年退職してからは専ら畑仕事をしていた。早朝から水やり、草取り、種付けをし、里芋、人参、とうもろこし、大根などを植えて楽しんでいた様子だった。収穫した食物は近所の人と分け合ったり、交換して助け合って生活していた。

一方、私の遊びはというと原っぱでシロツメクサの冠や空き地でのボール遊び、陣取り、ひまわり合戦、神社でかくれんぼ、秘密基地づくり、社宅探検など元気いっぱいだった。

大人たちに言われていたのは「海には行くな」だった。が、聞くはずもなく、近くの岸壁からテトラポットを伝って砂浜へ降り遊んでいた。

夏休みおなじみのラジオ体操。社宅内のマイク放送から「お猿のかごや」が流れ出す。社宅の間を抜け、側溝の脇を通り、三川坑のお風呂前へ集合し、ラジオ体操をするのが日課となる。



社宅でのラジオ体操の様子
浜崎良彦さん撮影

お風呂の横には集会所がありお楽しみ会、クリスマス

会があり、楽しい思い出ばかりが残る。そんな集会所だが三池労組の話合いも度々開かれており「常会」と呼ばれていた。遺族やガス中毒患者の家族が集まり意見を交わし合い、討論をしているようだった。私は出されたお菓子を食べながら終わるのをじっと待っていた。

お盆の頃になると広場に櫓を立て、社宅中の子供が集まり輪になって盆踊りをしていた。社宅の自慢するところは何と言っても広いお風呂。湯つぼは大きくお湯はいつも溢れ出ており、温度は自分たちでお湯と水の加減をして調節していた。時間帯によっては少ない時もあり、泳いでいたこともあった。知人を見掛けたらお互いに背中を流しあって語らうこともあり、子供たちもそれに倣っていたようだった。お風呂の帰りには家族や知人と大久保さんのかき氷やアイスクリームを食べによく行ったものだ。氷はサラサラで蜜はたっぷり、その上に練乳をかけて頂く。「ああ、おいしいー」と頭がキーンとするのを我慢

しながら食べていた。母や叔母と「大久保さんのかき氷が食べたいねー」と今でも味を忘れることはない。

学校は諏訪小学校、右京中学校。町から出て炭鉱電車の踏切を渡り、30分以上かけて通っていた。その踏切に沿うようにガタガタ橋という橋があり、ここは通学路ではないが、たまに近道をして小川開を通り抜け学校に通っていたこともあった。小学生の頃よくこの橋から落ちる夢をみており、鉄でできてはいたがぼろくガタガタと音を立てて怖いものだった。

石炭から石油へ変わりゆく世の中、楽しい生活も次第に変化していった。

引越してしていく人がだんだんと増え、とうとうバス路線も廃止。三川坑のお風呂は閉鎖され、お風呂は一つになった。隣人も減り、家の明かりも少なくなり、空き家が増えていったが、私の同級生は比較的最後まで残っていたように思う。

私が中学3年頃には立ち退きが決まり、ばあちゃんは南小浜社宅に移ることを決めた。高校1年のことだった。越してきた後も数回新港町を見に行ったが、すぐ閉鎖され取り壊し、ボタ山だけがそこにあった。

今も新港町の入口で見守っているお地蔵さまは、昔、私を可愛がってくれた方が、事故で亡くなられた後、建てられたそう。ばあちゃんが赤いエプロンを縫って、お地蔵様に付けていたのを覚えている。

生前ばあちゃんと懐かしさに思い巡らせ、「あの頃が一番楽しかった！」と活気ある毎日を振り返っていた。

今は無き私のふるさと、新港町。いつまでも心の中に。

子供の頃の思い出

田 中 祐 一

私は、荒尾市緑ヶ丘子鳩町 37 棟に生まれ、荒尾高校を卒業（昭和 50 年 3 月）するまでの 18 年間で荒尾で育ちました。保育園は緑ヶ丘保育園、小学校は緑ヶ丘小学校、中学校は荒尾第三中学校、そして荒尾高校へと進み、無事卒業して現在に至っております。母は 12 年前に 65 歳で他界しました。連絡の取れなかった父も、老人ホームにて暮らしているということを妹から聞きました。

田中家は、父母、私、弟、妹、妹と 6 人暮らしで、まあ何というかテレビドラマ的なことも稀にありました。小学生ぐらいの思い出というと、広っぱで近所の兄ちゃんたちと缶けりや釘たおし、パッチン、かくれんぼ、プロレスごっこ、ビー玉、すみか作り、パッチンの遠征などで、よその町に行っていました。（町とは言っても、小さな地区のことを昔はこう言っていました。）うぐいす町、子鳩町、やよい町、しきしま町、かつら町、かえで町、ひのき町など、覚えているのはそのくらいです。

忘れもしないのは、昭和 20 年に空襲で大牟田のほとんどの家が焼け、昭和 35 年、三池争議が 10 ヶ月続き、昭和 38 年 11 月三川坑で炭じん爆発があり、458 名の方が他界されたことです。平成 9 年に最後の三池坑が閉山したことも忘れられません。

爆発当時、私は小学 1 年生で、父と母とじいちゃんと住んでいました。当時の炭鉱は、一番方、二番方、三番方とあって、父は当日 3 番方で、朝帰って寝ていました。その朝、ドカーンという音がして、マイク放送（集会所）があり、父は着るものも着つつ、母に大声で「握り飯ば、2、3 個作れ。」と言って、バタバタと家を後にしました。じいちゃんと母と私たち兄弟は、何か恐ろしいことがあったことを実感していました。後から聞くと、父はつぶれた人々を救うために、救助隊で行ったとのこと。昼過ぎ一度帰ってきて、飯を食うか食わずで、2 回目の救助に行きました。そして CO 患者となりました。

そういうことがあって、定年を迎えた父は、荒尾市増永に家を建てました。近くには伯父（父の兄）や友人等がいて、楽しく過ごしていました。父はアルバイトで貝柱の粕漬けを作っていました。